

優秀賞

どかしつづけける人びと

千葉県 千葉市立星久喜小学校二年 小泉 晟利奈

わたしは「アンゼラスのかね」というアニメーションを見て、はじめてせんそうや原ばくのおそろしさをしりました。わたしの体が氷のようにかたまってしまいそうなくらい、おそろしいとかんじました。

この話は、長さき原ばくのひどさと、その中で生きつづけようとした人びとをえがいています。

原ばくがおとされたあと、やけおちたうら上だい一びょういんのあとが、ひばくでじゅうしょうをおった人たちの手当てをする場しよになりました。そこではたらくたった一人のわかいし、秋月たつ一ろう先生がやく三百人のかんじやのちりょうを引きうけることになりました。

秋月せんせいのかんじやさんたちのために、ひっしになっていりようきぐや、くすりをさがし求めて歩き回りました。わたしはそのすがたを見て、つらくても色々なことにがんばらなくてはいけないと思いました。そして、どんなことでもあきらめてはいけないと思いました。

秋月先生やびょういんではたらく人たちはいつも体の不自由な人や、おもいびょう気の人を先にひなんさせたり、ちりょうしたりしました。そして原ばくのひがいにあったあと、ひっしに生きつづけようとした足の不自由な少年が、

「ぼくはびょういんの人たちみんなに大切にしてもらい、しあわせでした。」という言葉のをこし、亡くなってしまいました。この時、わたしはむねがいっぱいになりました。なぜならわたしは、体におもいしやうがいをもつお兄ちゃんのことを

思い出したからです。お兄ちゃんは体が不自由なのでひとりでも何もすることができませんが、この少年にまけないくらい、とても一生けんめい生きています。お兄ちゃんの家ぞくみんなやびょういんの先生、学校の先生方といっしょにいる時、いつもしあわせそうな笑顔をしています。わたしはよく、

「せいちゃんはあいされてることをちゃんとわかってるよね。」

と、お兄ちゃんの心にこう話しかけます。そうすると、お兄ちゃんはとてもうれしそうなかおをします。

わたしのしょうらいのゆめは、秋月先生のような一生けんめいがんばるいしになることです。そして、かんじやさんに、

「だいじょうぶですよ。自分のびょう気がなおるとしんじていれば、きっとなおりますよ。」

と声をかけてあげたいです。